

会う人みな我が師なり

博多 龍ノ髭・らめんガラリー 店主：石塚 裕幸

現場に立つこだわり

真っ赤な手ぬぐいに、白く抜かれた感謝という言葉。まるで、自分の夢を追って25歳で脱サラし、人気ラーメン店を経営する石塚裕幸氏自身の熱い情熱を象徴するかのようだ。その手ぬぐいをきりりと締めた彼の頭の中には、常に、情熱・目標・謙虚の3つの言葉が秘められている。

現場にこだわり、忙しい時間を工面して月1回ずつでも、必ず経営している3店舗の厨房に立つ。それは、真心込めて作ったラーメンを食



Profile

石塚 裕幸 (いしづか ひろゆき)

昭和53年4月19日生まれ34歳。栃木市大平町出身・在住。県立栃木南高等学校(現・栃木翔南高等学校)、日本体育大学卒。サラリーマンを経て、ラーメン屋店主になる。大学時代に知り合った愛妻と25歳で結婚。5歳、3歳の息子と2歳の愛娘の良き父親。



べて、喜んでくれるお客様の顔が見たいから。そして、自分の思いをスタッフたちに背中であえていから。「俺が、この店をやっている」というプライドでもある。

常に目標を持つ

小学4年の頃に始めた学童野球。その魅力にとりつかれ、小中高とずっと野球っけ。ついには、野球を教えたくて教師を目指し日本体育大学に進学する。花形ポジションのピッチャーを務めていたが、1試合に3本のホームランをかっ飛ばすほどの腕前も持つ。

「大学生になるまでは、野球と家業の手伝いに明け暮れていたのですが、1年間は寮に入り、礼儀を学ぶことと遊ぶことを自らに課した」と。自分を見つめる時間がたっぷりあったことで、進路についてもおもいっきり悩む。当時、就職水河期と言われ、教師になるにも2〜3浪はあたり前と言われる中、「高額な給料や役職は欲しくない。ただ、やりがいがある」と。そして、選んだ道は、起業すること、食べている人の顔が見える飲食店を経営すること。

大学卒業後、地元にもどり就職、25歳で結婚。「まずは3年間我慢し、結婚して周りを固めてから、お店をやるつもりだった」と、計画を着々と進める。その間にも、食べ歩きを続けてイメージを固めていく。たまたま、名古屋旅行で入ったおしゃれなラーメン屋が琴線に触れ、今までになかった新しい感覚のラーメン屋を目指すことに。とは言っても、ズブの素人。看護師の妻にも支えられながら、繁盛店で単身修行。ラーメン本を買いあさっては納得のスパブツくりの精を出す。その傍ら、憧れのカリスマ社長はじめさまざまな研修会にも参加。無我夢中で突っ走って平成18年12月16日に、念願の1号店を小山にオープン。「負けず

嫌いだ」という石塚氏が勝負をかけたのは、定着した佐野ラーメンの逆を行く、龍の髭のように細長い本場博多の麺。豚骨独特の匂いや油つばさが苦手だったこともあり、スープは女性性が食べやすい臭みのないものを試行錯誤し完成させた。店内も「女性が1人でも入りやすい作り」をモットーに、古材を用い、シックで落ち着いた雰囲気。オープン当初こそ男性が多かったが、現在は3割が女性客だという。

「お店を始める前に掲げた目標は3つ。まず行列のできるお店をつくること。3年以内に2号店を出すこと。そして父親になること」。それらも全てコンプリートされた。奇しくも、2店舗目のオープンはずいぶん3年目の平成21年12月16日。そして、今年8月、3号店、らめんガラリーを開店。次に目指すは、35歳中に5店舗を持つこと。常に新たな目標を掲げ、チャレンジし続ける生き様は、「到達点があるからこそ、進むべき道がある」という信念から。

ひたむきな謙虚さ

強いモチベーションを維持し、順風満帆のように見えるが、本人にしてみると「いつも悩んでいる」のだとか。特に、スタッフを育てることの難しさを痛感しているそう。メニューのアイデアやイメージ通りの店づくりはできて、人を育てることは難しい」と。ようやく、今は安心してスタッフに店を任せられるようになったそう。

きっとそれは、人との触れ合いを何よりも大切に、「会う人みな我が師なり」(吉川英治書宮本武蔵の節)という謙虚な姿勢を貫こうとする姿が、功を奏したのだろう。「相手の良いところも悪いところも、全て勉強になります。自分から歩み寄ることが大切」。

休日には「家族サービスと、気がつけば仕事をしている。趣味は仕事ですね」と笑う。情熱を秘めた輝く眼差しに、次はどんな目標があるのだろう。栃木のカリスマ店主になる日も近いのでは。